

# THE YATOI

## —お雇い外国人教師の足跡—

平成10年8月31日～9月25日

2世紀以上に及ぶ鎖国ののち開国した日本にとって、諸外国の進んだ技術、知識を導入することは緊急な課題でした。そこで明治政府は留学生を海外に派遣するとともに、いわゆる「お雇い外国人」を多数招聘しました。なかでも大学等の教育機関では様々な分野で外国人教師の助けを借りたのです。

この時代のお雇い外国人教師の中には現在でもその名が知られている人が少なくありません。今回の展示では、お雇い教師たちの活動を概観するとともに、代表的な教師たちののこした足跡をたどってみたいと思います。

### 展示資料一覧

<>内は当館請求記号

#### ①公的記録にみるお雇い外国人

##### 1. 明治史要 附録概表

太政官修史局編

<YDM2240>

東京 博聞社 1876(明治9)

太政官修史局より出された「官省使府県雇使外国人表」。これは官省使別府県別私雇をあわせてお雇い外国人の一覧。国籍、人数、俸給等が記載されている。文部省は工部省に次ぎ多くの外国人を招いていたことがわかる。

##### 2. 文部省年報 第1 明治6年

[東京] 文部省 1875(明治8)

<YDM50731>

「官立諸学校」の章があり、各学校の沿革などの記載があるが、その中にお雇い外国人教師の名前が見られる。

### 3. 東京大学年報 第3 明治 15-16 年

〔東京〕 東京大学

<YDM48880>

当時の東大では、教師が自分の担当した学科の内容などについて、大学総理あてに「申報」という報告書を提出していたが、ここにとりあげた年報にもその「申報」が掲載されている。これにより、当時のお雇い外国人教師がどのような講義をしていたかをうかがい知ることが出来る。

### 4. 東京大学法理文三学部一覧

従明治13年至明治14年、従明治14年至明治15年

<YDM48881>

東京大学法理文三学部編

東京 丸家善七

各学部での講義科目、担当教官および試験問題などが記載されている。お雇い外国人教師の名前が見られ、担当していた授業科目が確認できる。

## ②外国人から見たお雇い外国人研究

### 5. The Mikado's Empire 皇国

William Elliot Griffis

<A-32a>

New York Harper & Brothers 1903(明治36) 10<sup>th</sup> ed.

お雇い外国人について最初に研究したとされているグリフィスは自身お雇い教師であった。彼は各国に在住するお雇い外国人に向けてアンケート調査を依頼している。この「皇国」は1876年の初版以降、版を重ね、長年にわたって欧米人の日本についての知識の源泉として大きな役割を果たした。

### 6. Things Japanese

Basil Hall Chamberlain

<B-38>

London Kelly & Walsh, Limited 1905(明治38) 5<sup>th</sup> ed.

広く日本文化に通じていたチェンバレンによる日本研究の集大成(初版1890年日本名「日本事物誌」)。その第5版である本書には「お雇い外国人(Foreign employes in Japan)」の項を設けてあり、近代日本におけるお雇い外国人の役割を強調している。

## ③日本人から見たお雇い外国人研究

### 7. 明治文化発祥記念誌

東京 大日本文明協会 1924(大正13)

<210.6-D17m>

400名余りの「明治文化に寄与せる欧米人の略歴」及びお雇い外国人をめぐる日本人の回想からなる「明治文化回顧録」を収めてあり、日本で最初の総合的調査研究といえる。開催要旨で大隈重

信は「…維新以後我国運の進展に特に功勳ありし来朝外人の事蹟を調査し、之を後世に伝ふる…」と述べている。

## 8. 近世日本国民史 第44 開国初期篇

徳富猪一郎著

<384-43>

東京 民友社 1933(昭和8)

徳富蘇峰による近世史の総論的研究。開国初期篇第19章に「日本文化に貢献せる渡来外人」がとりあげられている。

### ④日本に影響をあたえた教師たち

#### 【ヘボン】(1815-1911)

アメリカ合衆国ペンシルバニア州生まれ。宣教師であり医師であったヘボンが日本にやってきたのは、1859(安政6)年のことであった。それから帰国するまでの33年間、医療活動、英語辞書の編集、聖書の翻訳、「ヘボン式ローマ字」の普及、キリスト教教育、教会の建設など多方面にわたって活躍した。

## 9. 和英語林集成

平文 編訳

<833-cH52w>

横浜 1872(明治5) 2<sup>nd</sup> ed.

英文書名 : Japanese English and English Japanese Dictionary

日本で最初の本格的な和英・英和辞典である本書は、広く使用され、特に明治前期においては日本人編集の英語辞書に多くの影響を与えた。この辞書で使われたローマ字綴りの日本語表記は「ヘボン式ローマ字」と呼ばれて普及した。

## 10. Warera no syu Iesu kirisuto no Shin yaku zen sho

J. C. Hepburn 訳

<193.5-w2-H>

Yokohama 北英国聖書会社 1886(明治19) ローマ字綴り本文

本書によって「ヘボン式ローマ字」は確立された。日本語表記に直すと「われらの主イエス・キリストの新約全書」となる。

## 11. 十字架ものがたり

ヘボン 著 奥野昌綱 訳

<YDM20723>

東京 奥野昌綱 1888(明治21)

## 12. 新約聖書 上

ヘボン 訳 片子沢千代松 校註解題 <193.5-s2-H>  
東京 ナツメ社 基督教文庫 第4 1952(昭和27)  
内容：ヘボン小伝、ヘボン博士年表、聖書和訳の歴史、新約聖書馬太伝福音書(全)  
底本は明治6年刊行。ちなみに「新約聖書」は明治12年(1879)、「旧約聖書」は明治20年(1887)に完訳された。

【クラーク】(1826-1886)

アメリカ合衆国マサチューセッツ州生まれ。マサチューセッツ農科大学設立のために尽力し、同校の学長を務めた。1876年、札幌農学校の初代教頭として開拓使により招聘され、キリスト教に基づく近代的な全人教育を行う。帰国の際に残した”Boys, be ambitious”という言葉はあまりにも有名である。

13. Observations on the Phenomena of Plant Life

By W. S. Clark <70-63>  
Boston Wright & Potter 1875(明治8)

来日前の、アメリカにおけるクラークの研究である。カボチャを実験材料として、植物の膨張力、根圧、などについて調べたもの。

14. 札幌農學第一年報

クラーク著 佐藤秀顕訳 <YDM48715>  
開拓使 1878(明治11)

札幌農学校の現状や、学則および教育の経過、研究の結果などをまとめたもの。当時どのような構想のもとに札幌農学校が組織され、経営されたかを知るための好資料である。

15. 札幌農学校

札幌農学校学芸会編 <YDM48711>  
東京 裳華房 1898(明治31)

札幌農学校の案内書としてまとめられたものであるが、「第2章 札幌農学校の過去」にはクラークの業績や、学風・学生に与えた影響等について記されている。

16. クラーク先生とその弟子達

大島正健著 <734-28>  
東京 帝国教育会出版部 1937(昭和12)

著者は札幌農学校の1期生で、クラークに直接の教えを受けている。「馬上の訓言」という章では、有名な”Boys, be ambitious”という言葉がクラークが残し、札幌農学校を去っていった時の状況が語られている。

## 17. 「基督教の伝道師として見たる

ウイリヤム・S・クラーク先生」 内村鑑三

聖書之研究 第315号 (大正15.10) 聖書之研究社 &lt;雑4-18&gt;

札幌農学校の2期生である内村鑑三がクラークについて述べたものである。内村鑑三が同校に学んだのはクラークの帰国後であったが、クラークが残したキリスト教的薫陶の影響は強く残っていた。

## 【モース】(1838-1925)

アメリカ合衆国メイン州生まれ。1877年6月に来日し、東京大学で動物学や生物学を初めて講義した。大森貝塚の発見でよく知られているが、進化論の紹介者、日本の陶器の収集と体系化、日本建築の研究とモースの業績は多方面にわたっている。

## 18. First Book of Zoology

Edward S. Morse &lt;14-74&gt;

New York 1877(明治10)

スケッチ 174 点を挿入し、身近な生物をわかりやすく解説した自然観察の手引書。好評で版を重ね、モース訪日の渡航資金となった。

## 19. 動物学初歩

イ・エス・モールス 著 矢田部良吉 訳 &lt;YDM57572&gt;

東京 丸善 1888(明治21)

## 20. 「Shell Mounds of Omori」 Edward Sylvester Morse

Memoirs of the Science Department, University of Tokio

(東京大学理学部英文紀要) 第1巻第1号 1879(明治12) &lt;Z53-L769&gt;

日本に来てまもない1877年6月19日、横浜から東京に向かう汽車の窓から大森付近の線路わきに貝殻がたくさん出ているのを発見。発掘調査を行い、その研究成果が本書にまとめられている。日本初の縄文時代後期の遺跡—大森貝塚であった。これは日本における最初の科学的な発掘調査であり、日本の考古学、人類学の基礎を築いた。

## 21. 動物進化論

エトワルト・モールス 著 石川千代松 訳 &lt;YDM57599&gt;

東京 東生亀治郎 1883(明治16)

日本に初めて本格的な進化論を紹介したモースの講義録。近代化を推し進め、そして宗教的に寛容な日本人は、あまり抵抗なく進化論を受け入れた。

22. Japanese Homes and their Surroundings

Edward S. Morse <A-41>

Boston 1886(明治19)

307点のスケッチを挿入し、当時の日本人の住まいと生活の道具とそして町を記録。たいへんな好評を博して版を重ねた。

23. Catalogue of the Morse Collection of Japanese Pottery

Edward S. Morse <F-116>

Camb. 1901(明治34)

膨大な日本の陶器を収集し、1890年にボストン美術館に収められた。これは世界最大の日本陶器のコレクションであり、本書はその解説。産地別、窯別に体系的に分類して集められており、日本陶磁器発展の全体像を掴むことができる。

24. Japan Day by Day

Edward S. Morse <915.2-M884j>

Houghton Mifflin Co., 1917(大正6)

1917年にモースは40年前の日記と777点のスケッチをまとめて、本書を出版した。モースの日本滞在記であり、明治10年代の日本及び日本人の日常の姿を知るのには恰好の資料である。

25. 日本その日その日

イー・エス・モース 著 石川欣一 訳 <597-156>

東京 科学知識普及会 1929(昭和4)

【ベルツ】(1849-1913)

南ドイツのピーテッヒハイム生まれ。1876年6月、東京医学校(東京大学医学部)に着任したベルツは初期に生理学、後に内科学を教え、1902年6月までの26年間在職し多くの医師を育てた。日本の風土病の研究、温泉の効能の紹介、皮膚外用薬「ベルツ水」を作ったことなどでも知られる。

26. 内科全書(鼈氏)

エ・ベルツ 著 広瀬佐太郎 等訳 <YDM59069>

横浜 広瀬佐太郎等 1890(明治23)

ベルツは医師や医学生のために多くの医学書を執筆、日本の医学の進歩におおきな貢献をした。また、日本人に多い病気を取り上げ、日本の気候風土や生活の習慣を考慮にいれている。

27. 診断学(鼈氏)

フォン・エル・ベルツ著 土岐文二郎、保利聯 訳 <YDM58681>  
東京 金原寅作 1896(明治29)

## 28. 日本温泉考

ベルツ 著 桑田知明 抄訳 <YDM22745>  
東京 桑田知明 1880(明治13)

自然のミネラルによる温泉療法を紹介、日本における温泉医学の基礎を築いた。また、草津温泉の入浴法を調査して、その効能を解明した。

## 29. ベルツの日記

ベルツ 著 濱邊正彦訳 <765-31>  
東京 岩波書店 1939(昭和14)

彼の息子のトクによって1931年、ドイツで発表された。日本人の衣食住から政治・社会に関することが書かれており、明治時代の日本を知る貴重な史料となっている。この中には日記本文のほか、講演原稿や手記、手紙の類も含まれている。

## 【フェノロサ】(1853-1908)

アメリカ合衆国マサチューセッツ州生まれ。1878年、モースの仲介で来日。東京大学で政治学、経済学などを講義するかたわら、日本の美術にも深い関心を持ち、岡倉天真らと共に東京美術学校設立のため尽力する。1890年帰国するが、よく年再び来日、東京高等師範学校などで教える。能の英訳、紹介なども行っている。

## 30. 政治学講義 第1-3回(合本)

フェノロサ述 <YDM28019>

学外で行われた講演会の記録であるが、いつどこで行われたものかは判然としない。政治学の基礎として世態学がいかに重要であるかを社会有機体論の立場から説明。

## 31. 美術真説

フェノロサ述 大森惟中記 <YDM69372>  
東京 竜池会 和装 1882(明治15)

上野公園内教育博物館で開かれた龍池会主催講演会でのフェノロサの講演を筆記して小冊子にしたもの。龍池会は渡欧経験のある官僚を主要メンバーとして明治12年に結成された日本美術育成団体。

## 32. 浮世絵展覧会目録

エルネスト・エフ・フェノロサ著 <YDM69504>

東京 蓬枢閣 1898(明治31)

明治31年4月15日～5月15日まで、上野新坂伊香保温泉楼において、小林文七所蔵の浮世絵の肉筆版画展が催された。これはその際の目録である。小林に委任され、フェノロサが諸論、解説の全文を書いている。本書はその邦訳版。

33. Epochs of Chinese and Japanese Art Vol.2

By Ernest F. Fenollosa

<Aa-107>

London William Heinemann 1912(大正元)

フェノロサの死後、夫人が遺稿を編纂したもの。世界的な視点に立って、アジアの美術をとらえようとした点に特色がある。

34. Noh or Accomplishment

By Ernest Fenollosa and Ezra Pound

<Ba-681>

London Macmillan. 1916(大正5)

フェノロサの死後にエズラ・パウンドによって刊行されたもの。能楽に対するフェノロサの研究成果を、十五編の謡曲の紹介・抄訳などと共に編集している。付録には、フェノロサの記した「羽衣」の楽譜も掲載されている。なお、フェノロサの能の英訳については、平田禿木の協力によるところが大きいことが指摘されており、さらにフェノロサの遺稿にエズラ・パウンドの手が加えられている。

【ラフカディオ・ハーン】(1850-1904)

ギリシア生まれ。フランス、イギリスで教育を受け、米国での新聞記者時代を経た後、1890年ハーパー社の特派員として来日するが、その後すぐに同社との関係を絶つ。日本では島根県立松江中学校での教師生活などを経て、1896年日本に帰化、小泉八雲と改名する。その後は1896年に東京帝国大学文科大学の教師に就任(1903年辞職)、1904年から早稲田大学に出講。英語の文学作品を通じ日本を世界に紹介した功績は非常に大きい。著作も多い。

35. Two Years in the French West Indies

Reprinted in a series: Selected works of Lafcadio Hearn's first edition <KS158-95>

New York Harper 1890(明治23)

[Tokyo, Yushodo 1981(昭和56)]

来日前に書かれたもので、仏領西インド諸島の中のマルティニーク島に二年間滞在し、その際の見分を記した紀行文。雑誌「ハーパーズ・マンズリー」誌に掲載され、好評を得た。この成功が日本行きのかっかけとなる。

36. Glimpses of unfamiliar Japan.



By Lafcadio Hearn <915.2-H436g>

Boston Houghton, Mifflin [1894(明治27)]

日本上陸直後の印象から始まり、松江での見聞を中心に記した日本の印象記である。「日本人の微笑」(Japanese Smile)について触れた部分はよく知られている。

37. In Ghostly Japan

By Lafcadio Hearn <895.63-H436i>

Boston Little Brown 1899(明治32)

日本の怪談の再話ものが見られる。「牡丹灯籠」の再話もの(A Passional Karma)などを収録する。

38. Kwaidan ; stories and studies of strange things.

(Selected works of Lafcadio Hearn's first edition) <KS158-94>

Houghton, Mifflin (Boston) 1904(明治37)年刊の複製

[By] Lafcadio Hearn.

Tokyo, Yushodo, 1981(昭和56)

ホートン・ミフリン社から刊行された初版本の複製である。古典、民間説話から題材を得て作りあげられた創作集。「耳なし芳一」など、収録作品の中には日本でも非常に有名なものがある。

39. 小泉八雲

田部隆次著 <348-151>

東京 早稲田大学出版部 1914(大正3)

ハーンの伝記。その中にはハーンの妻、小泉節子がハーンの思い出を語った「思い出の記」が収録されている。ハーンの「耳なし芳一」執筆の際のエピソードなどが見られる。

◎請求記号が YDM ではじまる資料は、マイクロ資料でのご利用になりますので、展示期間中でもご利用になれます。

国立国会図書館 03-3581-2331(代)

ホームページアドレス <http://www.ndl.go.jp>

■国立国会図書館 ■□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□■03(3581)2331■